



## 4. ヘルスコミュニケーション学関連学会機構賞 2022年度優秀論文賞受賞者コメント

奥原剛

東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学分野

受賞論文

Okuhara T, Okada H, Goto E, Tsunozumi A, Kagawa Y, Kiuchi T. Encouraging COVID-19 vaccination via an evolutionary theoretical approach: A randomized controlled study in Japan. Patient Educ Couns. 2022 Jul;105(7):2248-2255.

この度は優秀論文賞を賜り誠にありがとうございました。

私は若いころから文学が好きでした。小説や映画の中で描かれる人間の業のようなものに強く惹かれてきました。例えば、人が生き方を変えたくても変えられない、あるいは周囲がそれを許さない、そのような人間の業との格闘の哀しさ、美しさ、あるいは滑稽味、そのような人間臭さに強く惹かれてきました。

私は、東京の上野駅から、歩いて不忍池を抜けて、職場へと通っています。夏になると、不忍池を、蓮の葉と花が埋め尽くします。蓮は沼に根を張り、美しい花を咲かせます。その様から「泥中の蓮」という伝語があります。

人間を蓮に譬えるならば、これまでの主要な行動変容理論は、蓮の花だけに着目してきたのではないのでしょうか。人間には、利益と損失を比較考量して行動するといった、蓮の花のように目に明らかな、理知的な側面があります。しかし一方で、人間は、得られる望みの無いものを望み、悔いても詮無きことを悔い、喜怒哀楽の狭間を浮沈しながら生きています。少なくとも私はそうです。私の研究という行為について申しますならば、40歳目前で研究の道に入って後、「この研究を続けたらものになる」といった利益をあてにできたことは一度もありません。「勝ち目のない負け戦を戦っている」という気持ちで日々を送ってきたように思います。しかし、人間とは、根源的に、そういう生き物ではないのでしょうか。やむにやまれぬ想いに突き動かされ、一生を生き、終えていくものではないのでしょうか。蓮の花が泥中に根を張るように、人間の理知的に見える行動もまた、他人からは見えない心の沼、自分にも見えない心の沼、得体の知れない根源的な欲求に、実は支配されているように思います。

この度の賞を賜った研究では、上記のような自分の人間観に比較的合致していた進化心理学の根源的欲求モデルを理論的枠組みとして用い、自分の人間観に対して正直に問いを立てました。この研究で賞を授与いただけたことを素直に嬉しく、励みに思います。

もし自分のこの乏しい能力で叶うのなら、今後、学術を手に人の心の泥中を探検し、まだ誰も発見したことのない花を見つけるような研究を行いたいと思います。

精進いたします。

ありがとうございました。